台湾の「日本語文学」における翻訳の装置

李　郁　蕙

1、問題の所在

翻訳とは一般に二言語の意味作用間に対称的で等価な関係があるという前提で、一つの言語で書き手が発するメッセージが翻訳者を経由して別の言語で読み手に受け止められる仕組みと認識されている。しかし、別の言語共同体における語の意味と一対一の対応関係を持つ非集成的な言語共同体の存在が本当にあり得るのか、また、本来翻訳が表象された時点では消去されざるを得ないはずの翻訳者という媒介が最初から最後まで透明のままでいられるのか、これらの問題はすでに酒井直樹をはじめ多くの研究者によって提起されてきた。[①] ところで、戦前「大日本帝国」のもとで植民地作家によって生産された「日本語文学」という翻訳の実践を思い出すならば、そのような指摘が的確であることが裏付けられるだろう。というのは、その書き手の母語が日本語でないために、日本語を学習する、また創作する過程の中で、母語を日本語に、もしくは逆方向で置き換えていくような翻訳行為が生起してくる、つまり書き手自身が翻訳者の位置を占めているからである。

一方、日本語文学といえば、時代的背景が特殊だったこともあって、何といっても書き手たちのアイデンティティの表現に関する問題がこれまで最もよく取りあげられているのである。しかし、民族的感情にまつわる評価の硬直化は避けることができず、更なる具体的な解明を待つといわざるを得ない。そこで、自ら翻訳者を兼ねるという書き手の両義性が一つの有効な端緒となり得るのではないかと考えついたのが、本稿の出発点だったのである。その理由は、翻訳

者が役割を果たすために、二つの言語共同体の間を瞬間瞬間に揺れ動いていかなければならないからである。そのつど翻訳者の内面に分裂が必然的に起こり、その不安定性を検証することで、翻訳者としての作家が二つの言語に近接・離脱の反復過程を織り出すことにつながっていくと考えられる。

このような問題意識に基づき、以下、台湾の日本語文学のテクストにおける翻訳の機能及び表象のされ方を探っていきたい。

2、台湾の多言語状況

具体的な分析に入る前に、そもそも日本語文学が生産されていた当時の台湾の複雑な言語事情について説明しておこう。日本領有前の台湾では、民族的には、主に大陸対岸の福建や廣東地方から移住した漢民族やオーストロネシア語族に属する原住民によって構成されていた。また、日常の言葉としては漢民族の閩南語――これは話し手が圧倒的に多かった故に、日本語が入植してから「本島語」か「台湾語」として相対されている――や客家語、及び原住民の諸語が民族や出自の相違にしたがってそれぞれ使われていた。[②] けれども、これらの言葉はいずれも標準的書き言葉を持たないため、知識人を識別するリテラシーの手段としては漢文が機能していたのである。

ところが、日本が近代的学校制度を導入し日本語の使用が普及する一方、漢文は1920年代後半に入ってから中国帰りの留学生の提唱によって白話文への変容を余儀なくされた。白話文が提唱される所以には「言文一致」の思想が見て取れるものの、それはあくまで北京語を基準にしているものにすぎなく、台湾で使われる上述の諸言語の「言」と「文」を一致させるにはあまりにも遠く乖離していたのである。そのような事情に絡んで、日本語は漢文が独占してきた、読み書きの手段ないしステイタス・シンボルとしての位置に次第にすり替わっていったわけである。

別な言い方をするならば、台湾の日本語文学は例えば同じく日本の植民地主義のもとで展開された韓国の日本語文学とは出発点を異にしている。韓国の場

合、ハングルという読み書きの体系が成立していたのに対し、台湾の場合、日本語による教育を受けた新世代のほとんどが日本語以外には適切な表現手段を持たなかったのである。[3] そのような中、台湾の日本語文学は多民族・多言語的土壌によって必然的に繁栄せざるを得なかったと見ることができる。だが、心にとめておかなければならないのは、日本語が公の場で多民族間の伝達を果たす公用語として通用していたものの、公以外の場では上述の諸言語が各自の地域社会内で依然として生活に密着して使われていた、という実情である。例えば、1941年の統計によると、台湾全人口約568万人のうち日本語理解者数は323万人を超え、57%を占めていたというデータがある。[4] とはいえ、中には日常の挨拶程度ぐらいしかできない者が多く含まれており、生活全般にわたっては日本語を使用し、あるいは使用できる人はかなり限られていたように思われる。[5] そのため、たとえ日本語作家たちのように留学か中等以上の教育を通して創作するほど高度の日本語能力を獲得した人であっても、日常生活の中で会話の相手によっては日本語と母語とを混在させながら使い分けざるを得ない場面が頻繁にあったと推察される。

このように、自らが実際の生活の中で複数の言語を併用している上に、多言語が錯綜している状況にある台湾を作品の背景として捉える限りでは、作家たちにとって翻訳の操作はリアリティーを全うするためにも絶対に避けては通れないものといっていい。

3、翻訳過程の内在化

それでは、三つのテクストを並べながらそれぞれに内在している翻訳過程を順番に見ていこう。まず、一つ目は張文環（1909-1978）の「論語と鶏」(1941.9) という作品である。[6]

①子供達はクルスカと云つてから台湾語でマツチを持つて来いと云つて威張つたものだ。

「クルスカマツチを持つて来い」　　（張文環「論語と鶏」）

（下線はいずれも引用者、以下同じ）

これは、台湾在来の私塾「書房」に漢文を学ぶ源という少年とその友達が、「ク、ル、ス、カ」と四つの音しか聞き取れない日本語を話すまねをしながら遊ぶ場面である。語り手の前置きの説明から、括弧内の発話における前半の四文字は日本語であるが、後半は日本語訳されている「台湾語」だったことが分かる。

次に、王昶雄（1916-）の「奔流」（1943.7）を見てみよう。

②丁度そこへ母がお茶と駄菓子を載せた盆を持つて入つて来た。「いらつしゃい」これは国語で挨拶した。その後で、

「いやな雨季に入りましたね。困りものです。」

これは本島語であつた。

「母です。国語は片言しか解せんもんだから。」と私は紹介すると、伊東は、

「あ、お母さんですか。初めまして。わたし伊東春生（ハルオ）です。えらい御邪魔してゐます。」

と挨拶した。これは国語である。私はいさゝか意外の感に打たれた。伊東がかゝる場合でも本島語を出さないのである。その瞬間に私は、伊東の持つてゐる人生観はひどく徹底してゐるなあ、と感じた。私は已むなくこの挨拶を母に通訳せねばならなかつた。

（ふりがなは原文、以下同じ。王昶雄「奔流」）

「奔流」では、東京から帰郷した医者「私」の眼を通して、日本人の妻を娶り、改姓名した台湾出身の伊東春生とその甥とが「日本人」に同一化するか否かで確執する様が描かれている。ここに引いたのは、伊東と「私」と「私」の

母三人の会話を描いた箇所である。各々の発話の後に逐一付け加えられるト書きにより、「私」の母のセリフの中の初めの挨拶だけが日本語であり、その後の天気に関する「本島語」の発話が意味を日本語に翻訳されたことは露にされている。反面、そうして問題化されていない「私」と伊東との会話が日本語で行われているのは開示されることとなる。ちなみに、「私」がいかなる内容の「本島語」をもって母に伝えたかについての記述は省略されている。

そして、最後に呂赫若（1914-1951）の「玉蘭花」（1943.12）を挙げておこう。

> ③鈴木善兵衛は水面を睨んだまま振り返りもせずに「虎坊。疲れたかい」とでも言つたらしい。言葉が分らないので黙つてゐると、彼は振り返つてニヤツと笑ふのだつた。それだけで私は満足だつた。彼と一緒にゐるといふ安心だけで私も笑つて「キ。魚あるの」と訊ねたが、言葉が通じないので「うん、うん」とうなづいて見せた。「キ。今晩お母さんに煮てもらつて一緒に食べませうね」「うん、うん」鈴木善兵衛はまた振り返つて笑顔を浮べる。（呂赫若「玉蘭花」）

この引用は、台湾に生まれ育つ子供の「私」が、当時家に泊まっていた日本人の鈴木と魚釣りに出かけた思い出を語っている一節である。「言葉が分からない」ということが繰り返し強調されているため、同じく日本語で表記されているものの、鈴木と「私」との対話が実際お互いに異なる言語で進められていることが察せられる。ただ、「私」の発話の部分だけに翻訳の操作がなされているわけではない。鈴木の発話も結局のところ、それを台湾の現地語で理解し記憶している「私」によって回想されたものにすぎないため、日本語から現地語に、さらに日本語へと再現されるというふうに二重な翻訳過程がそこに付随していると考えられるべきであろう。

こうして、それぞれの引用における波線部が示しているように、翻訳行為はテクストの内部で行われている。このことを翻訳を施した作者自身が隠蔽しよ

うとせずに、それどころかト書きや語りなどを仕組むことにより前景化させている点で、これら三つのテクストは翻訳の介在を通じて異なる二つの言語共同体の関係性を問題化することに主題の一つが見いだされると考えることができる。そして且つ、意味深長なことに、その関係性はいずれを見ても例外なく非対称的な力学を呈しているのである。

4、日本語の特権性

というのは、①の引用では、子供の遊び心から生じた半端な日本語とはいえ、ここでその日本語が選択された動機は、日本語による教育への強い憧れに基づいているからである。一方、②の場面における日本語使用は次のように特別に意味づけられている。つまりそれは、相手に通じ得ないのを分かっているにもかかわらず、強引に日本語で語ろうとする伊東という人物の「日本人」として生きていく固い決意の現出なのである。ちなみに、この設定には「日本人の精神的血液」として日本語の絶対的な優位性を被統治者に押しつけていた日本の植民地統治のイデオロギーという文脈が刻み込まれている。それでは③になるが、ここに描かれている二人のやり取りはほほえましいものだが、「私」の叔父が東京に出奔した事件が物語っているように、日本語が「新時代」の中心を象徴するオーソリティー的なものになっていることは見逃せない。

つまり、以上に引いた三つの例の中では、日本語と台湾の現地語とはお互いの意味作用（signification）が対称的で等価であるかのように翻訳されているのだが、両者の表象にはある一定の上下関係が書き込まれている。もっといえば、日本語には台湾の現地語をはるかに凌ぐ優位性がつねに付与されていることが共通して見て取れる。この点を踏まえてコンテクストに含み込まれている翻訳の仕組みに注目すれば、それがまさしく日本語の特権化を促し、またはそれに加担するための装置にほかならないことが確認できる。というのは、テクストが日本語文学として表象されている以上、作家たちの翻訳過程における二つの言語の役割分担——すなわち、台湾在来の言葉による翻訳内容がいずれも

テクストから意図的に外されたりして、翻訳の表象を果たす言語が悉く日本語でしかない——という点に基づいたからだけではない。むしろ、それと表裏一体の問題として、翻訳または通訳それ自体が現れる文脈の中で健全な機能を欠いている点が挙げられるからである。

これについて少し説明するならば、そもそも通訳という行為は、双方の言葉を翻訳しながら、コミュニケーションの成立を図ることを前提にするものと思われる。ところが、とりわけ②の引用に見られるように、「私」の「通訳」という操作は、発話者の伊東が意志の疎通に支障をきたすおそれを了承した上で否応なしに要請されてきた、きわめて不自然なものである。しかも、この場面に居合わせた三人がともに「本島語」を理解しているため、通訳は言語的立場の優位意識に伴って発話された日本語のためしか機能し得ないのである。このような通訳の跛行性が照射するのは、日本語に付与された、その特権性以外の何ものでもないだろう。

もっと分かりやすい例を加えてみよう。それは、楊逵（1905-1985）の「新聞配達夫」（1934.10）と、呉濁流（1900-1976）の「アジアの孤児」（1946.9）に書き込まれている「通訳」の場面である。「新聞配達夫」では製糖会社が村の人々が生計を立てるための土地を強制的に買収し、他方「アジアの孤児」では統治当局の役人たちが農民の生産方式などについて不条理を言いつけるというような状況の下で、通訳が仲立ちをすることとなる。けれども、通訳が介在しているものの、対話はあくまで日本語を話す側から一方的に進められたいびつなものであって、日本語の話せない植民地大衆の声が最初から対話に参与することなく排除されていた。つまり、ここにおいても、日本語による発話の暴力性を伝達する装置としての通訳が見受けられるのである。

ところで、以上のように翻訳という装置を通じて日本語に特権性を見いだしている作者の発話位置はいかなるものであろうか。この点に関しては、テクストにおける通訳を担う者についての書き込みから、作家たちの日本語の権力性に対する侵略もしくは抵抗を見る方法があるだろう。けれども、その前に注意

深く読まなければならないのは、そもそも日本語の特権性が、日本語文学のテクストの中で違う形を取りながら、しかし随所ほのめかされているものである。というのは、日本語能力がつねに政治面、経済面の階級的な差異性を表す役割が与えられているからである。[7] そうした中、作家たちがそれとなく日本語の特権性に同調していることが見え隠れしている。もっといえば、作家たちは自ら描く通訳者のように日本語の特権性に反発、防御しようとする側面が当然考えられる。だが、その一方において、やはり一人の追従者としてその権力性の膨張に手を貸してしまうという曖昧な位置づけから免れ得ないのも事実なのだ。とはいっても、彼らが翻訳を操作する過程の中から、その日本語の特権性を少しずつくつがえしていく可能性が開かれてくる、という興味深い点を見逃せない。

5、日本語の規範性の破棄

先ほど第3節で注目したのは、日本語以外の言語による会話の意味を全文ごとに日本語で言い直してある部分である。以下、訳語とともに原語が提示されている箇所に焦点を当ててみたい。例えば、以下の引用で見られるように、原語の後に括弧をつけ、中に訳語を入れて示すものがある。

> 街は穢く、くすんでゐて、停子脚（台湾市街地に在る独特の建築様式で廻廊みたいなもの）の柱は煤け、白蟻に蝕ばれて倒れかゝつてゐた。そして強い日ざしを避けるために軒毎に筆太に屋号——老合成・金泰和——とか書いた幕を張つてゐた。　（龍瑛宗「パパイヤのある街」）

これは龍瑛宗（1914-）の「パパイヤのある街」（1937.4）という作品からの引用である。テクストの中で、引用箇所のほかにも、「聘金（へいきん）（内地人の結納金のごときもの、本島人は売買結婚なり）」、「汝（り）や（君といふ意なるも本島人は侮蔑せられてゐるやうに感じる）」といったものがうかがわれる。一方、これ

ら三例の中で示されている「停子脚」「聘金」「汝」などの原語は、音と意味を同時に配慮しながら漢字を当て、その上にさらに音読みもしくは原語の発音を表すためのふりがなをつけたりする「台湾語」または「本島語」である。ついでながら、いずれの表記の形もこれ以外の作品においてしばしば見受けられるものであることを断っておこう。

ところで、以上の訳語はわりと長い注釈の形を取っているのだが、実際作家、作品によっては簡潔で短いものもちりばめられている。再び龍瑛宗の主な作品でいうならば、「出草（首狩り）」、「過房子（養子）」（「貘」1941.10）⑧のような括弧入れのものと、以下の引用に見られる「黒褲仔」と「嬉媒」というようなふりがなを経由して表記されるものを挙げることができる。

> 外に出ると正午の太陽が脳天を焦がすほど、強く照りつけてゐた。街は白い光に溢れてゐた。路上には、たゞ一人の山から来た、うら若い女が担い棒もたわわに柴を担いでゆくのが見えた。短い黒褲仔と空色の上衣の彼女の淡い鳶色の顔は、淋漓と汗ばんで、燃ゆるやうなバラ色に上気し、仄かな困憊を美しく頬にとゞめてゐた。
>
> （略）豚肉をぶら下げた屋台がずらりと並び、臓腑や血の滴つた頭骸骨などが陳列してゐる前を嬉媒たちが足踏みしながら値切つてゐるのが見える。手垢でよごれた巾著から白銅貨をとり出して丹念に算へてゐるものもあつた。　（傍点は原文。龍瑛宗「パパイヤのある街」）

こうして、同一作家の筆下に現れているものであるだけに、「停子脚」に対するような、いわば付加的な意味まで確実に取れるようにするための意訳と、「出草（首狩り）」など一対一の直訳との使い分けは注目に値するだろう。また、同じ作品の中に意訳をくくる括弧と直訳を示すふりがなと二種類の翻訳の表象が同時に存在していることも、非常に興味深いといえる。とりわけ、意訳の場合、「廻廊」や「結納金」、「君」に相当しているようにそれぞれの意味が一旦

ほのめかされているものの、なぜ、「みたいな」とか「ごとき」といった様態助動詞を入れて遠回しに解釈されなければならなかったのだろうか。

結論を急げば、この使い分けを通じて、翻訳者としての作者が受け止めていた、母語と日本語と異なる二つの言語共同体の関係性は垣間見せられることとなるのである。というのは、翻訳者が原語と訳語とを一対一で記述する場合、その両者の意味作用が完全な対応関係にあるという前提に基づくからと捉えることができる。その反面、訳語を示しながらもなお「台湾」「独特」の、または「本島人」の言語感覚などを付け加えずにいられないのは、原語と訳語との対応関係を不十分、さらに根本的に不成立と見なしているからと考えられる。この点で、たとえどちらの形を取る翻訳の実践も結局のところ、言葉の「指示対象性」の現実性を日本語に認めてしまうことになるとしても、日本語によって規定される経験と自らの母語によって規定される経験との差異性はテクストに刻み込まれることにもなる。そしてその差異性をもとに、アイデンティティの表現が創造されつつ、可能となっていくのである。

この点を裏付けるものとして、別の作家からの資料を引いておこう。

> 眠床（ミンツン）の翻訳語はねやでも寝床でも、単に床でもベットでも在来語ほどにはピンとこない。眠床はもつと幻想的で、古典的でわれわれの懐想はなかなか尽きない。（略）畳生活の観念からでは想像できない別個の世界のものなのである。　（周金波「停仔脚其の他」）

引用は、周金波（1920-1996）の「停仔脚其の他」（1942.10）という随筆からの抜粋である。この中で、周は「停仔脚（テンアカ）」、「眠床（ミンツン）」「後尾（アウボイ）」といった台湾独特の建築様式の固有名詞を説明しながら、「眠床」という言葉には「幻想的」、「古典的」な余韻がしみ込まれているためそれに相当する適切な訳語がないという思いを吐露している。[9] これは、上述の龍瑛宗の翻訳の実践を導き出したものと響き合うものではないだろうか。そして、そうした思いから、冒頭で述べ

ているような、異なる二つの言語共同体の間に意味作用が等価で対称的に相関しているという翻訳の通念は見事に解体されてしまう。また、周のいう「畳生活の観念」とは「別個の世界」にいる「われわれ」、それに龍瑛宗が執拗に使う「本島人」などの言葉が暗示しているように、日本語という翻訳関係にかかわる他者の形象を可視化することによって、「台湾語」、ひいてはその言語を話す「台湾人」という主体を自己構成していく、という様が読み取れるのである。[10]

ところで、以上のような翻訳の表象を検討すると同時に、翻訳者としての作家がなぜ翻訳の操作を読者に開示しなければならなかったかという原点に戻って考える必要があるだろう。先ほど引用した「パパイヤのある街」の一節をもう一度例にするならば、要するに、短い段落の中で使い分けをされている「女」と「嬤媒(おんな)」とは、そもそも日本語の「女」と統一し得ずに、「嬤媒(おんな)」という「台湾語」を書き込まざるを得ない必然性は果たしてあるのか、という問題が残っている。これについては、同時代の作家たちはそれが「郷土色」を増すための技法というふうに述べているのだが、[11] そもそもそのいわゆる「郷土色」は具体的にどのように表出されているのかを見てみよう。

そこで、「女」と「嬤媒(おんな)」とが書き込まれているコンテクストに注目すれば、「女」には「黒」と「空色」の服装に加えて「淡い鳶色」に「燃ゆるやうなバラ色」の顔つきをするような、カラフルに美しい印象が浮き彫りにされている。これに対し、「嬤媒(おんな)」については「臓腑や血」が滴っている肉屋を後景にしているような汚れた、マイナスのイメージしか受け止められないことが明らかになる。このような使い分けから、またしても日本語と「台湾語」との優劣関係が浮かび上がってくるわけであるが、この点は日本と異なる場に適切な言語感覚を構築するために日本語を新しい用法に向けて使おうとした作家たちの試みがうかがえる意味で看過できないだろう。

同じことは、先に言及した周金波の翻訳の実践についてもいえる。周は上述の随筆の中で母語への堅持をほのめかしている一方、例えば「水癌」(1941.3)の中で「停仔脚(ていしきやく)」や「四色牌(スセキパイ)」、また「『ものさし』の誕生」(1942.1)の中に

おいても「放剣光(バンキヤンコン)」「米篩目(ビータイバク)」などの言葉を積極的に書き込んでいく。これら四つの言葉を日本語で解釈してみるならば、「停仔脚(ていしきやく)」は前述の通りに台湾在来の建築様式であり、「四色牌(スセキパイ)」はばくちの一種であり、「放剣光(バンキヤンコン)」は護身用の武術であり、一番最後の「米篩目(ビータイバク)」は伝統の食べ物を指す。それでは、それぞれが用いられているコンテクストに焦点を当てると、前二者は「台湾人」の母性愛が「日本人」にとうてい及ばないという嘆きを引き立てるための叙述に現れている。一方、後二者はもっと直接に対照的な描写に組み込まれている。すなわち、進退に窮する際の消極的な策である「放剣光(バンキヤンコン)」と突貫しながら前進する一方の「皇軍進撃」との対比、そして「豪華」な昼寝を貪っているように岸壁に泊まっている「瀟洒な巡洋艦」と岸辺の木蔭に屋台が「米篩目(ビータイバク)」を売り「苦力」がたたずむという風景の構成である。

つまり、これらの言葉は「内地」と「本島」の差異を表現する機能と分かちがたく結びついていることが分かる。言い換えれば、これらは文化的差異性を表すために書き込まれる記号にほかならないのである。こうした括弧付けやふりがなの表記を経由して翻訳が操作されたり、ないし未翻訳のままであったりということを通じて、その一字一字の原語は言語間、文化間的差異を顕在させながら、テクストを〈文化横断的〉なものたらしめている。そして、そうしたテクストを読み込むのに、われわれ読者はそれら未翻訳の言葉が意味を持つ文化の地平そのものにつねに関与しなければならなくなる。この意味において、テクストにおける翻訳の装置は日本語の規範性を破棄してその束縛から脱出するための働きを持ち、また、それによって日本語文学といわゆる〈近代日本文学〉との差異を論じることが可能となるのではないだろうか。

6、おわりに

以上、台湾の日本語文学のテクストにおいて翻訳が操作されていたり、もしくはあえて操作されていなかったりする痕跡をたどりながら、その意味づけを試みた。結論として、翻訳という装置は往々にして〈日本語〉の特権性を代

弁＝表象するものであるということができる。しかし、と同時に、それが作動しているうちに、日本語の規範性が少しずつ崩されていく一方、作家たちの母語はその日本語との差異をもとに「対－形象的」に生成していくのである。つまり、自ら翻訳者を兼ねる作家たちは、翻訳者という曖昧性の強い立場が故に日本語が体現する権力への占有と破棄を反復しているように考えられる。そして最後に、もう一点を付け加えるならば、日本語文学のテクストに翻訳行為が内在化されているため、それに対してさらなる翻訳を行うことの不可能性を強調しておきたい。言い換えれば、中国語に訳することはもとより、一般でいう日本語を母語とする日本人の書いた文学と同じ感覚で読むことも基本的に無理であろう。なぜなら、そうすると、その中における「台湾語」の表記法の雑種性、複合性が示しているような、いわば〈日本語文学〉が〈日本語文学〉たる最大の特質を見過ごしかねないからである。

注

①詳しくは、酒井直樹『日本思想という問題―翻訳と主体―』（岩波書店、1997.3）を参照。

②台湾の多言語状況については、林正寛の「多言語社会としての台湾」（三浦信孝編『多言語主義とは何か』藤原書店、1997.5）や、「台湾の多言語状況と近代日本」（田中克彦・山脇直司・糟谷啓介編『言語・国家、そして権力』新世社、1997.10）などの論文に詳しい。

③この点に関しては、例えば張文環の「論語と鶏」（1941.9）、「頓悟」（1942.3）、「地方生活」（1942.10）などのテクストから、日本語に親近感を持つ一方、従来の読み書き手段を果たしていた漢文を疎んじる主人公の造型がうかがわれる。さらに、呂赫若の「清秋」（1944.3）や、呉濁流の「アジアの孤児」（1946.9）に登場する若きキャラクターたちを例に加えれば、台湾の日本語文学における漢文は往々にして旧社会・旧世代的・前近代的要素として中心人物の視点から最も隔たった場所に位置づけられていることが分かる。この点は、書き手たち自身の内面における漢文の意味づけと重ねて読むことが可能ではないかと思う。

④鍾清漢『日本植民地下における台湾教育史』（多賀出版、1993.2）283頁を参照。

⑤若林正丈は、植民地出身の非母語話者が日本語を自由に駆使できるようになるのに、終戦までに中学校かそれに相当する学校、もしくは日本内地の小学校を卒業したことが最低限の条件だと考えている。またその統計によると、その条件を満たした台湾人は日本統治下の50年間で総数８万人前後という。Masahiro Wakabayashi "Taiwan's 'Nihongo-jin' : Poetry in a second language" **Japan Update**, October 1994, pp.16-17を参照。ちなみに、中等以上の教育を受けたのであれば、すぐれた日本語能力を有するという措定は日本語文学の書き手たち――もちろん彼ら自身も含まれているが――によってもなされている。

⑥以下引用する作品については、発表年月は括弧内に記入するが、詳細な初出は省略させていただき

たい。周金波の場合『周金波日本語作品集』（緑蔭書房、1998.3）に収録されたものを参照にした。周以外の作家の作品はいずれも『日本統治期台湾文学　台湾人作家作品集』（全5巻別巻1、緑蔭書房、1999.6）に再収録されたテクストに依拠する。なお、引用は原本の旧仮名遣いにしたがう。ただし、漢字は部分的に常用漢字に直した。以下同じ。

⑦頁数の関係で具体的な引用を示さないことにしたが、あまり知られていない日本語文学の紹介をかねて、それが読み取れるテクスト名をいくつか挙げておこう。すなわち、本文でも言及した王昶雄の「奔流」（1943.7）や、周金波の書いた一連の作品「志願兵」（1941.9）、「『ものさし』の誕生」（1942.1）、「郷愁」（1943.4）、「銃後の便り」（1943.6）、「助教」（1944.9）が取りあげられる。それに、張文環の「部落の惨劇」（1941.8）や龍瑛宗の「南に死す」（1942.9）の中にも、学歴や世代の差異を表す標識としての日本語能力が書き込まれている。

⑧同じ例として、「知らざる幸福」（1942.9）における「把灰（近親姦）」、「ある女の記録」（1942.10）における「阿丑（道化役者）」、「若い海」（1944.8）における「水鬼（溺死人）」などが見られる。

⑨もっとも、周金波はもう一編の随筆「囝仔（ギナ）の弁解」（1941.10）では、日本語を話すつもりでいながら不本意に口にのぼってしまう母語を、「日本人」としての自負を損ねかねない「糟みたい」なものと否定的に捉えている。しかし一方、本文で取りあげているように、母語への執着をも抱いているに違いない。

⑩酒井直樹は前掲書『翻訳と主体』の中で、このことを「対－形象化」と名付け、日本語への欲望が「中国」、または「西洋」との翻訳実践系の「対－形象化」を通じて喚起されてきたものと指摘している。本論はそれに大いに示唆を得、「台湾語」も同じく、そうして日本語との翻訳関係を通じて形象的に成立しかけていたのではないかと考える。同書28-29頁を参照。

⑪1936年6月7日に東京において「台湾文学当面の諸問題」という題のもとで文聯東京支部座談会が開催された。その中では、張文環、翁鬧（1908-1940）などの作家たちは「郷土色」を増すために「台湾固有の名詞」を取り入れ、その上に意訳のふりがなをつけるというような「台湾、内地を折衷した」表現手段の有効性を強調している。詳しくは『台湾文芸』3巻7／8号（台湾文芸連盟、1936.8）を参照。

＊討議要旨

西原大輔氏は、当時台湾に住んでいた日本人作家も作品中に台湾語を用いて、日本語の規範を崩すのではなくむしろ日本人の異国趣味を満足させようとしている、台湾人作家の作品もそれと結果的には同じではないか、と質問し、発表者は、日本語の特権性が政治的に強調されていた状況の下で、台湾人作家の表現には、それに与する優越意識と、逆にそれに対する反発、という両義性がある、やはり日本人作家とは分けて考える必要があろう、特に佐藤春夫・野上弥生子などの旅行者が書いたものには、台湾人の日本語をわざとカタカナだけで表現していて、排除意識が表れている、といった点にも注意すべきである、と答えた。

金貞禮氏は、韓国においてはハングルの文体が成立しかけていたというが、ハングルは500年前に成立しており、その認識はおかしいのではないか、と質問し、発表者は、日本語の影響を受けて近代的な文体が成立したのがこのころで、そのような母語の文体を持たなかった台湾との言語状況の違いを言いたかっただけである、と答えた。